〈学界消息〉

◇日本環境教育学会第４回大会（茨城）（1993.8）

○分科会報告「野外活動と環境教育」

手続き上の不備からプレプリントに載らなかった「野外活動と環境教育」の小集会は，それでもａ教室が満員立席といった盛況で，この分野への関心の高さを如実に示していた。

世話人の柴田が用意のプリント２枚について話題提供をし，以降自由討議に入った。

柴田は，現在の野外活動のパターンを自然との関わり方から例えばキャンプを例にあげて1)自然破壊汚染型，2)自然順化型，3)自然保護創出型，4)信仰的修行・哲学的思索型に区分し特に1)～2)について詳しく論じた。現今の野外活動の多くが，自然を求めつつ，その実自然不在でいたずらに都会的要素を持込み，生理的次元でのドンチャカ騒ぎで結局は自然の側に大きなインパクトを与えているのは，1)自然へのモラルの欠落，2)自然理解の不足がその大きな要因と考えられる。これはまた日本の野外活動がスポーツ振興法の枠のなかに取り込まれている為に，文部省も体育局が所管，勢い指導者も体育系の人材が多くて，どうしても自然不在に成りがちになる。これは夏休みの２泊３日型学校キャンプにみられるゲーム，ソング，ダンス，スキャトそれにキャンプファイヤーがその典型でここには全く自然不在といってよいほどの「何故自然を指向するのか？」といった理念が欠落している。従って，環境倫理に悖る行為が，何のためらいもなく堂々と行われている。柴田はもう一枚のプリントで，１泊２日のキャンプで，ゲーム，ソング，キャンプファイヤー無しの実験的成果を提示して，キャンプは「日常性からの脱却」よりも現代文明への反省を秘めた「生活の原点への回帰」ととらえるべきであると主張した。

この話題提供に対して，ネイチャーゲームを主催する降旗氏から「同感である。我々もネイチャーゲームを自然保護へのアプローチの手段と心得て努力している」，日本レクリエーション協会の天野氏も「我々も従来のキャンプの有り方を反省しているが，指導者の不足が悩みの種である」。日本自然保護協会の開発氏から「我が協会では自然観察指導員の養成に志し，全国に講習会をもって14年，すでに１万人にライセンスを発行した」。生態計画研究所の小河原氏は「疲弊した自然に積極的に手を加えて復元とその活性化を計っている。野外活動の場やそのハードもそうした観点から問いただされるべきだ」。兵庫自然教室の戸田氏は「メガロポリスの神戸市の子供を中心に，自然の中に活動の拠点を設けて永年試行錯誤しつつも少しずつ着実な成果を挙げている」等々の発言があった。

要は，自然への倫理の確立，何故自然なのかという理念の確立，指導者の養成，体育系から理科，社会，芸術，生活科など合科的活動への転換，関係企業，自治体，行政などの意識改革，それに基づくハードウェアーの手法やソフトのメニューやプログラムの確立が必要であるとの結論であった。その中にあって環境教育の果たす役割が，学校教育社会教育はじめあらゆる分野で大きいし，大切であることを参会者一同，改めて確認しあった。

（文責　柴田敏隆）

◇日本環境教育学会第５回大会（神戸）

第５回大会が，フィールド・ワークショップのプレ大会が５月13日，本大会が５月14日・15日に甲南大学を会場にして511名の参加を得て開催された。発表内容は以下の通りであった。

（谷口　文章）

プレ大会

フィールドワークショップ　13日（金）

神戸コース：神戸市を中心にした都市的環境教育の実践例の紹介

大阪コース：さくやこの花館の見学とUNEP施設のエコシステムの学習

京都コース：法然院森の教室における環境教育実

践の紹介
奈良コース：奈良県立民俗博物館の見学と民俗学における環境教育の研究

第5回大会

○特別講演　14日（土）
講演者：中川米造氏（大阪大学名誉教授・日本保健医療行動科学会会長・日本医学教育学会副会長，環境医学・医学概論専攻）
演題：「文明と健康環境」

○シンポジウム　15日（日）
テーマ：「文明と環境――21世紀の多様な“教育”を探る――」
コーディネーター：鈴木善次氏（大阪教育大学教授，科学教育・科学史）
シンポジスト：佐島群巳氏（日本女子大学教授，社会科教育）
槌田劭氏（京都精華大学教授，使い捨てを考える会代表，自然科学概論）
鳥越皓之氏（関西学院大学教授，環境社会学・民俗学）
山田卓三氏（兵庫教育大学教授，理科教育）

○研究発表Ⅰ　14日（土）
地方公共団体における環境教育・学習関連情報の提供施設の実態
中沢知生（アルマジリジューム）・市川智史（(財)日本環境協会）・阿部治（埼玉大学教育学部）
環境教育による地域活性化方策
千葉佳一（奈良県磯城郡川西町教育委員会リーダーバンク登録者）
地域素材に学ぶエコプログラムの開発――その1「伝承文化」――
佐島群巳（日本女子大学）・伊原浩昭（千葉県教育庁社会教育課）
地方都市における自然・文化環境の持つ役割
渡辺修・小林甫（北海道大学教育学部）
自然的・社会的・文化的環境の一体化による主体的環境観の育成（そのⅡ）
佐島群巳（日本女子大学）・中島美恵子（高岡市立西条小学校）
「まちを学校にする」94年・現状と課題――総合的環境教育に関する研究・Ⅱ――
梶島邦江（聖徳大学）・佐藤守正（新潟・上関小学校）
文化財保存と環境教育
山口誠治（大阪文化財センター）
公的社会教育における環境教育実践
朱雀英八郎（自然保護協会社会教育センター講師）
ドイツ・メルディンガー学校における環境教育事例について
武田敦之（神戸市環境局環境審査室）
学校誘拐システム――持続可能な社会創りを目指す住民運動の充実・発展および子供のより健全な成長の可能性の拡大そのための仕組みの提案――
萩谷洋（埼玉県戸田市立喜沢中学校）
讃岐平野のシンボルとしての溜池とその環境教育的意義
新見治（香川大学教育学部）
樹木名札についての考察
金田平（財団法人日本自然保護協会）
新たな森林利用と環境教育に関する一考察（Ⅳ）――わが国における林業教育の位置づけ――
関岡東生（東京農業大学）
東大北海道演習林における森林体験セミナーについて
柏村恒（東京大学）
環境教育施設における展示の，製作意図と利用のギャップ
小林毅（自然教育研究センター）
風景の作法――カルスト草原を考える――
庫本正（秋吉台科学博物館）
土を使った環境教育（第2報）――博物館での実践――
福田直（埼玉県立自然史博物館）
研究型博物館における環境教育
藤原道郎・赤井裕・白井豊・堀江義一（千葉県立中央博物館）

博物館における環境教育プログラム事例（1）
——水圏ビオトープ（生物空間）の育成——
赤井裕（千葉県立中央博物館）
博物館における環境教育プログラム事例（2）
——水圏生物の生育環境と多様性の保全——
赤井裕（千葉県立中央博物館）
自然景観に対する高校生の美意識について——科学的知識が感性に及ぼす影響——
藤岡達也（大阪府立勝山高校）
小・中学校における環境教育の現状
荒木光・榊原典子・越前美香（京都教育大学）
環境学からみた環境教育
鈴木紀雄（滋賀大学教育学部）
私の考える環境教育
来見誠二（滋賀大学教育学部・大学院）
朽木中学校における環境教育の実践
来見誠二（滋賀大学教育学部・大学院）
中学校技術科における廃棄車イスのリサイクルを中心とした環境教育
上田学（大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校）
中学校における酸性雨データベースの活用
秋吉博之（兵庫教育大学附属中学校）・小出邦親（福岡市立当仁中学校）・尾関徹（兵庫教育大学）
N高等学校における環境教育の実践について
辻彰洋（滋賀大学教育学部）
身近かな自然環境を考える——東京八王子市リサーチパーク建設問題を教材として取り上げて——
斎藤三男（都立日野台高校生物科）
環境科学科設置——その取組みと現状——
宮下和巳・岸田光平・田伏政昭（和歌山県立向陽高等学校）
総合教科としての環境学の一例（大気汚染について）
藤川宣雄・中道貞子・武田章・出野上良子（奈良女子大学文学部附属高等学校）
環境教育のメルクマールと学習能力を身につけるすじ道
吉田尚司（川越高等学校）
「ホタル飛ぶ川めざして！」——生活排水アドバイザー登場——
吉川慎一郎（八尾市環境部環境総務課）
郡上八幡の環境教育的考察
増田直広・阿部治（埼玉大学教育学部）
神戸エコアップ研究会の活動報告
秦誠（神戸エコアップ研究会）
大阪市における環境教育の試み
谷村載美（大阪市教育センター）
「自分達の吸っている空気調べ」の支援と環境ネットワーク形成
内田誠一（八尾市環境部環境総務課）
親子環境学習会の実践
時井純子（久留米市環境保全室）
みんなで調べた！身近な自然——市民参加の環境学習の取り組み——
有馬進一・菊池久登（藤沢市生き物調査研究会）
新米地方議員の目で見た地域社会の環境問題
宮崎恒子（奈良県・川西町議会議員）
市民参加の森作りと植生管理
中川重年（神奈川県林業試験場）
環境保全意識の育成過程における都市農地と農業の役割
樋口利彦・石川宗樹（東京学芸大学野外教育施設）
農山村エコミュージアムづくりによる都市・農山村の交流
小川泰彦・中込卓男・岩谷美苗（自然文化誌研）・木俣美樹男（学芸大野外教育施設）
豊かな自然環境を活用した環境教育——自然に対する感性を培い自然認識を深める——
藤井昭義（神戸市立君影小学校）
水環境学習における「認識・思考・実践化」への実証的研究
井坂尚司（滋賀県蒲生東小学校）
校外教育における環境教育の試み——哺乳類を題材にして——
飯沼慶一（成城学園初等学校）

小学校における環境教育の位置づけ

田中敏久（杉並区立済美教育研究所）

自然と社会の複合的な環境認識をどう育てていくか

相地満（東海市立平洲小学校）

エネルギーについての見方や考え方を深める学習指導の研究——第6学年「電流のはたらき」を中心にした環境教育の試み——

佐島規（千代田区立麹町小学校）

初・中等教育におけるエネルギー教育のカリキュラムに関する研究（その1）——児童・生徒のエネルギーに対するイメージの様態——

佐島群巳（日本女子大学）・高山博之（京都教育大学）・山下宏文（品川区立第二延山小）・善財利治（佐倉市臼井中）・鈴木真（杉並区立桃井第四小）・佐島規（千代田区麹町小）・田邊佳伸（杉並区立桃井第三小）・伊原浩昭（千葉県教育庁）・伏木久始（文化女子大学附属杉並中・高）・石井恭子（お茶の水女子大学附属小）・佐藤道幸（お茶の水女子大学附属中）・石原敦（保谷市立保谷第一小）・竹沢ゆみ代（日本女子大学・院）

初・中等教育におけるエネルギー教育のカリキュラムに関する研究（その2）——児童・生徒のエネルギーに対する知識・体験・行動・価値の様態——

佐島群巳（日本女子大学）・高山博之（京都教育大学）・山下宏文（品川区立第二延山小）・善財利治（佐倉市臼井中）・鈴木真（杉並区立桃井第四小）・佐島規（千代田区麹町小）・田邊佳伸（杉並区立桃井第三小）・伊原浩昭（千葉県教育庁）・伏木久始（文化女子大学附属杉並中・高）・石井恭子（お茶の水女子大学附属小）・石原敦（保谷市立保谷第一小）・佐藤道幸（お茶の水女子大学附属中）・竹沢ゆみ代（日本女子大学・院）

初・中等教育におけるエネルギー教育のカリキュラムに関する研究（その3）——小学校におけるエネルギー教材の分析——

佐島群巳（日本女子大学）・高山博之（京都教育大学）・山下宏文（品川区立第二延山小）・善財利治（佐倉市臼井中）・鈴木真（杉並区立桃井第四小）・佐島規（千代田区麹町小）・田邊佳伸（杉並区立桃井第三小）・伊原浩昭（千葉県教育庁）・伏木久始（文化女子大学附属杉並中・高）・石井恭子（お茶の水女子大学附属小）・佐藤道幸（お茶の水女子大学附属中）・石原敦（保谷市立保谷第一小）・竹沢ゆみ代（日本女子大学・院）

初・中等教育におけるエネルギー教育のカリキュラムに関する研究（その4）——中学校・高等学校におけるエネルギー教材の分析——

佐島群巳（日本女子大学）・高山博之（京都教育大学）・山下宏文（品川区立第二延山小）・善財利治（佐倉市臼井中）・鈴木真（杉並区立桃井第四小）・佐島規（千代田区麹町小）・田邊佳伸（杉並区立桃井第三小）・伊原浩昭（千葉県教育庁）・伏木久始（文化女子大学附属杉並中・高）・石井恭子（お茶の水女子大学附属小）・佐藤道幸（お茶の水女子大学附属中）・石原敦（保谷市立保谷第一小）・竹沢ゆみ代（日本女子大学・院）

仏教思想（成唯識論）から見る環境教育論

山田弘司

東洋的自然観の再評価——Ⅰ.『淮南子』の生態学的解釈——

佐藤孝則（天理大学おやさと研究所）

日本の先哲に学ぶ環境保全の思想

木谷要治（横浜国立大学教育学部）

日本環境倫理学のモデル——南方熊楠の環境保護思想——

三村泰臣（広島工業大学専門学校）

環境教育と消費者教育の連接を求めて——Erich Fromm を基底とした社会心理学的アプローチの

試み——
今村光章（京都大学大学院）
エコロジズムの考え方
山口祐司（宮崎公立大学）
女性と開発と環境教育による関係性の再編
槇村久子（奈良文化女子短期大学）
子どもの自然体験と自然イメージに関する基礎的研究
永吉宏英（大阪体育大学）
環境教育こそ人間教育の出発
平沢信夫（(学）小山学園東京テクニカルカレッジ長野教育センター）
「環境教育」を進める立場の者の心のサブノート
白砂洋志夫・林邦夫（上智大学理工学部）
環境教育における人間研究の重要性について——ロハ台から子どもの目の40年——
篠崎恵昭（埼玉大学教育学部）・西城戸司（埼玉大学理工学部）
宿泊を伴う野外教育事業に関する調査研究——東京都内の社会教育行政における野外教育事業調査から——
森川一郎（都立教育研究所）・生越哲男（大田区教育委員会）・大小治悦夫（練馬区教育委員会）・川上玲子（渋谷区教育委員会）・中曽根聡（杉並区教育委員会）・吉本隆一（渋谷区教育委員会）
東南アジアの自然と民族に学ぶ
本庄眞（奈良県環境教育研究会・奈良県東榛原小学校）
ゲーム・ソング型学校キャンプの環境教育的反省
柴田敏隆（三浦半島自然保護の会）
無人島体験キャンプにおける野性動物素材の取り込みと参加者の反応——生活・調査体験と“保全”意欲との関係——
立澤史郎（京都大学理学部動物学教室）
ウトナイ湖サンクチュアリにおけるボランティアワークショップ
原田修（財団法人日本野鳥の会）
野外レクリエーションと自然環境保全についての一考察
佐藤初雄（国際自然大学校）
環境教育の実践例に関する一考察
鈴木真理子（大阪大学大学院人間科学研究科）
環境価値観における自然——人工次元について——
榎本博明（名城大学教職課程部）
牛乳パックのハガキ作りから考える３Ｒ教育の実践——体験学習の循環過程試論——
山本幹彦（財団法人・京都ユース・ホステル協会）
意欲を育てるために——実践と協同——
乾淑子（北海道東海大学）
環境教育の根本問題について（１）——環境教育は何を目指すか
金森正臣（愛知教育大学・生物学教室）
工科系学生の環境意識
河野汀（湘南工科大学）
その気になった若者たち——環境活動への取り組みと自己意識の形成——
西城戸司（埼玉大学理学部）・斎藤紀代美（子どもの人権埼玉ネット）・川崎敬郎（埼玉大学教養学部）
意識調査より探る参加型大学環境教育の可能性
高山進・持木一宏（三重大学）
信州大学教育学部授業「環境教育」の紹介
渡辺隆一（信州大学志賀自然教育研究施設）
大学総合科目における環境教育の実践例——コメと野菜づくり——
谷口文章（甲南大学）・天野雅夫（甲南大学）
東京学芸大学における環境教育の20年史と今後の課題
木俣美樹男・樋口利彦・小川博久（学芸大野外施設）
環境教育の方法論とその実践に関する研究——８．通学園エコミュージアムについて——
木俣美樹男（学芸大・野外施設）・小川泰彦（自然文化誌研）・中込卓男

（小金井市立緑小学校）・柴田一（都立園芸高校）

大学の大教室多人数授業で学生の個性発揮を目指す環境教育を試みる——郷里の再資源化活動を調査研究する——

川又淳司（立命館大学）

「持続可能な社会」構築のための総合的・統合的環境教育の重要性

和田武（愛知大学）

児童・生徒の環境問題に対する意識調査

中本久代（神戸市立上高丸小学校）・路次威彦（神戸市立妙法寺小学校）・田崎孝（神戸市立桜ヶ丘中学校）・丸野康弘（神戸市立生田中学校）・岩本哲人（兵庫商業高校）・米田勍（総合教育センター）

幼児教育者養成教科で“環境”をどう紹介しているか（続）

近藤正樹（白梅学園短期大学）

保育者養成課程における環境教育について——教員の意識及び教育内容と方法に関する調査——

田尻由美子（精華女子短期大学）・井上美智子（姫路学院女子短期大学）

霞ヶ浦周辺に住む中学校生徒の「霞ヶ浦に対する意識」

中山和彦（筑波大学）・吉村治子（筑波大学大学院）

高校生の環境問題に対する意識の現状——効果的な授業実践に向けての展望——

泉貴久（専修大学松戸高校）

日本環境教育学会会員の「環境教育の内容」の考え方の現状

宮本公仁子・中山和彦（筑波大学）

身近な生物の形態に関して大学生が持つイメージ

岡田美恵子・桜谷保之（近畿大学農学部）

環境教育における生態系概念育成の意義——高校生・大学生の意識調査——

正岡真樹子・藤田稔・鈴木善次（大阪教育大学）

小学生にみる自然イメージと自然体験との関連——ことばと絵の分析から——

桜昭博・今村豊・鈴木善次（大阪教育大学）

環境教育とSTS教育の関連について——実践へ向けての提案——

石川聡子（大阪大学）・鈴木善次（大阪教育大学）

○研究発表Ⅱ　15（日）

ECO-UP Method For Your School

宮崎裕明・和泉良司（横浜市教育文化研究所）

環境教育へのエデュティメントの適用

井坂匠（沖ソフトウェア株式会社）

イギリス環境教育の新動向について

岩本陽児（英国暁星国際大学）

環境教育の国際ネットワークの課題

原田泰（物質工学工業技術研究所）

サイ科学系情報の動向と環境教育

西本安範（大自然の会・大自然の法則研究会）

異常気象・日本の食糧自給・環境教育

西本安範（地球環境ネットワーク「地球村」

「静岡県のみずべ100選」と環境教育

北川光雄（静岡英和短期大学）

環境教育と環境ファシズム

杉原利治（岐阜大学教育学部）

いま，なぜ足尾鉱毒事件か？——“水”の講座の講師をつとめて——

杉浦公昭（東洋大学工学部）

中学社会科での環境教育の一展開——リゾート開発を中心にして——

吉水裕也（大阪教育大学付属天王寺中学校）

高校『地理』・『現代社会』における環境教育の試み——模索と実践——

原真一（愛知県立春日井西高等学校）

開発教育の視点をとり入れた環境教育（Ⅱ）

善財利治（千葉県佐倉市臼井中学校）

環境教育ビデオの開発と効果的活用——私たちの

くらしと森林——

鈴木真（杉並区立桃井第4小学校）・伊原浩昭（千葉県教育庁社会教育課）

子どもの知覚空間内における音・におい環境の基礎的構造

寺本潔（愛知教育大）・石川純子（愛知県公立小学校）

音の環境教育の取り組みについて

金城巌・奥田孝史・辻井洋一・今立高康・厚井弘志（大阪府公害監視センター騒音検査課）

集合住宅地での住み方についての親と子どもの意識に関する研究

柳原加代子・西村一朗（奈良女子大学）

衣生活と環境教育

磯部容子（佐賀大学教育学部）

活動を中心とした環境学習プログラムの作成と実践

岩木啓子・鈴木洋子・橘多津子・内藤嘉奈江・林律子・樋口貴子・山本元子・横山和代（コープこうべ環境問題研究会）

生活科学と環境教育——計測学実習としてのグリーン・コンシューマー調査——

矢内秋生・古沢広裕・池田勝枝（目白学園女子短期大学）・中村博幸・秋尾保子（京都文教短期大学）

大学教育の課題——環境とつながる「からだ」——

松岡信之（国際基督教大学）・徳山郁夫（千葉大学）

環境教育としての体育——発育発達に見る「からだ」の広がり——

徳山郁夫（千葉大学）・松岡信之（国際基督教大学）

健康概念と環境教育——文明の永続性をめざす教育，その基本認識（1）——

林智（立命館大学・非常勤）

自教園を中心とした環境教育の展開

路次威彦（神戸市立妙法寺小学校）

小学校における湿地の環境改善学習と原体験学習

湊秋作，藪中敬滋，濱口晃行，田原正己，水口千津，藤本徳子，辻理恵，芝崎勝善，松下進，和田秋美，谷口康則，真砂美紀（滝野川小学校）

名古屋市内のタンポポ調査隊——名古屋市科学館のタンポポ調査——

野田嘉昭（愛知・天白高校）

土壌動物のはたらきの教材化に関する素材研究——ミミズとダンゴムシが土壌に与える影響を中心として——

奥村裕之・北野日出男（東京学芸大学）

大阪狭山市，河内長野市のタンポポの分布調査について

松本弘（裕之）（大阪府立狭山高等学校）

測量に基づく環境教育教材の試み

松山正將・花渕健一・菊地清文（東北工業大学）・松下紀幸（株式会社復建技術コンサルタント）

衛星画像データと環境教育

細山田三郎（鹿児島大学教育学部）

人工的環境から学ぶ環境教育に関する研究

小澤紀美子（東京学芸大学）

国有林を利用した森林教室について

伊藤香里（林野庁大阪営林局指導普及課）

東京学芸大学公開講座『野外における環境教育』の実践をふりかえって

樋口利彦・東原昌郎・小川潔・木俣美樹男・北野日出男（東京学芸大学）

一般市民を対象とした環境教育入門講座の実例

笹谷康之（立命館大学理工学部）

○フィールドワークショップ

（神戸コース）

神戸エコアップ研究会

学会の全国大会では，初めての試みとして行われましたフィールドワークショップの神戸コースの計画を報告します。

テーマは「都市に於ける環境教育」とし，小学校でのトンボ池づくりと，都市公園での事例につ

いて学習しました。

北は釧路から南は宮崎まで，全国各地から24名の参加者を得て開催しました。

最初のプログラムでは，全国児童によるトンボ池づくりとその授業への活用について，市立名谷小学校の元校長先生と担当教諭から，ＶＴＲやカリキュラム指導案を使って説明していただきました。次に，都市公園である奥須磨公園では，行政職員や先生，地元市民などで結成された神戸エコアップ研究会によるホタルの成虫の放流やトンボ池づくりなどの事例を紹介しながら，兵庫県自然教室の方から，公園内の環境教育の題材探しについて解説をいただきました。

ワークショップの所要時間が，移動時間を除いて，それぞれ１時間半と短いプログラムであり，少し欲張り過ぎた内容であったかと反省しています。後日，行いましたアンケートでも，奥須磨公園でのプログラムは，短いとの意見がありました。

このアンケートでは，いろいろな感想や意見をいただき，辛口のご意見もありましたが，総じて良好な評価をいただきました。(参加者のご好意を感じました)。今回のフィールドワークショップの反省と今後の活動に役立てたいと思っています。

なお，本企画の実施には，名谷小学校の先生方，兵庫県自然教室など多数の方々の協力を得て，無事終了することができました。これらの皆さんと，遠路はるばるご参加いただきました会員の皆さんに，この場を借りまして厚く感謝申し上げます。

（大阪コース）

福島　古（企画担当）

大阪コース設定の意義を，ＮＧＯとＵＮＥＰの果たす役割と国際交流，２つの施設が持つエコシステムの見学に置きました。これは，企画担当として次のようなことをねらいとしているからです。93年10月国連施設がはじめて大阪の地に誕生したことは，日本のＮＧＯにとっても大きな意味を持つことになります。即ち，アジアと欧米，ＵＮＥＰ本部との環としての位置づけです。つまり，アジア太平洋地域事務局がバンコクにあるのですから，関西新空港を経由した人事の交流と大阪発世界行きの情報の発信が可能な段階に来たとも言えるでしょうか。ＧＥＣ職員や上級審議官の方から直接に講義やＵＮＥＰに関する情報を得ることが出来たことは，大変に有意義でありましたし，総合すると，ＧＥＣ（地球環境教育センター）を核として，ＵＮＥＰセンター大阪と日本環境教育教育学会との良き関係の生まれる契機ともなりましょう。

ＵＮＥＰセンター大阪は，大都市の総合的な環境管理を取り扱うことになっており，①情報の収集，提供や図書館の開設②環境モニタリング，アセスメント，トレーニングなどの研修③コンサルティング・サービス④研究⑤広報等をその事業内容としています。ここにも，日本環境教育学会として取り組むべき課題との共通性が見出せます。つまり，行動科学としての環境教育の側面――「現地の環境で，現地の素材を用いて，現地の環境を改善するための環境教育・技術移転をさぐり，交流する」と言うことになるでしょうか。この大都市に存在する２つの施設の，大きな価値にあらためて拍手を送りたい。

（京都コース）

- タイトル：お寺の森での環境教育
- 参加者：14名
- 場所：法念院森のセンター（共生き堂）
- 進行：西村仁志（フィールドソサエティー）
  山本幹彦（財団法人京都ユースホステル協会環境教育教育事業部）
- 内容：　アイスブレーキングの後，「お寺の森の生きものたち」とのタイトルのスライドショー。フィールドへ出，法念院の境内に残された大木や池と動物たちとの関係について話しを聞きながらのんびりと歩く。墓地の横で，このフィールドを使って子どもたちと一緒に行っている活動を参加者同士で体験した。「始めまして」・「自然の色のパレット」と活動を通して参加者同士の関係が深まってゆく。境内を抜け，大文字山への木立の

中をゆっくり登りながらフィールドの雰囲気を充分に味わう。時間の都合で大の字までは行かれなかったが，それは次回のお楽しみ。森のセンター（実は，共生き堂というお堂の一つである）に戻り，センター内の説明を聞き，一日のふりかえりでプログラムは終り。法念院のお墓に眠る文学や哲学の偉人も，学会がこんなところで行われるなんて思ってもいなかったに違いない。

・所感：環境教育の実践を伝えるには教室内では無理がある。参加者の中には「一度来てみたかった」という方も多く，この様な機会を作ることで，大会をきっかけに，多様なネットワークのきっかけになればと思う。

（奈良コース）

奈良環境教育研究会　本庄　眞

せっかく奈良に来ていただくのだから，奈良らしいフィールドワークショップができないかと考え，歴史や民俗を背景にした環境教育を試みてみた。今回，奈良県立民俗博物館の全面的協力を得て，実施することができたのは，幸いでした。テーマは，「人間と自然との長いつきあいから生み出された風景から学ぶ－大和郡山市旧矢田村をフィールドとして－」。具体的には，次の２つの視点で迫ってみようと考えた。①奈良という地は，長い歴史の中で，人間の手が絶えず加えられてきた地域である。その風景から人間や社会の何を読みとれるのか。②その風景を環境教育としてどのように生かせるのか。…参加者と一緒にフィールドを歩きながらその方法を共に模索していこう。

さて，今回の企画に参加いただいたのは，１２名。小学校・高校・大学の教師，大学生，大学院生，自然の家の職員などである。まず，民俗博物館の展示物や公園内にある移築復元民家を簡単に見たあと，フィールドに出かける。普段見慣れている民家，神社，寺，水田，溜め池，畑，墓などの風景を見ながら，民俗博物館の浦西学芸員の話を聞き，意見を出し合う。当時の農村の暮らし，社会環境や精神環境などが少しずつ見えてくる。これは，現在の暮らしの在り方を見つめ直す環境教育の一つの重要な視点になるように思われた。博物館に帰ってからの話し合いでは，この地域全体をエコミュージアムとして，環境教育に生かすことはできないか，など様々な意見が出された。今後とも民俗，歴史環境のフィールドワークを環境教育の一つの切り口として，継続的に研究していきたく思います。協力いただいた，奈良県民俗博物館には重ねてお礼申し上げたい。

○サテライト・シンポジウム／ミニ・ワークショップ　15日（日）

（１）サテライト・シンポジウム

「環境教育としての冒険学習ワールド・スクール」横山緑（自然文化誌研究会）（会場Ｇ）

「環境教育の根本問題を話し合う」金森正臣（愛知教育大学）（会場Ｈ）

「食と農をめぐる環境教育」鈴木善次（大阪教育大学）（会場Ｆ）

「大学における環境教育の実践と課題（第２回）――環境意識・行動変化を生み出す教育の創造――」和田武（大学環境教育研究会）（会場Ａ）

「第三世界と環境教育」上田啓子（東和大学国際教育研究所）（会場Ｍ）

「本音で語る『いい夢まちの人づくり』――自治体における環境教育実践ネットワークづくり――」奥田孝史（大阪府）（会場Ｄ）

「学校教育（幼・小・中・高）ネットワーク」植田善太郎（泉大津市条東小学校）（会場Ｅ）

「幼児期の環境教育」近藤正樹（白梅短大）（会場Ｌ）

（２）ミニ・ワークショップ

「環境教育ゲームをつくってみよう」小林毅（ネイチャーセンター研究会）（会場Ｂ）

「環境プログラムとしての『スライド・ショー』の可能性」川嶋直（(財)キープ協会）（会場Ｊ）

「ペープサート『郡川ホタル物語』」美濃原弥恵（八尾市生活排水アドバイザー）（会場Ｋ）

「耳を澄まそう，自分に人に地球に優しい音風景」長谷川有機子（スタジオ・マイ・ペース）（会場Ｉ）

「Project Learning Tree(木と学ぼう)」山本幹彦

((財)京都ユース・ホステル協会)(会場C)

• サテライトシンポジウム・環境教育としての冒険学習ワールドスクール

今回のサテライトシンポジウムはエコクラブのワールドスクールと自然文化誌研究会の冒険学校の実践をもとに冒険の持つ環境教育的な側面とその意味，そして冒険学習における教材とその活用について提案し，論議を深めることを目的に行った。

ワールドスクールは米国の探検家ウィル・スティーガーが提唱し，世界各地の学校と探検の現場をコンピューターネットワークでむすび，子どもたちの質問に答える形で地球環境のいまを訴えかけるものである。また，渡りをする動物たちの定期最新情報を提供したり，各学校がプロジェクトを作り活動を報告し合ったり，ワールドフォーラム（ロールプレイングゲーム）まで展開している。北極プロジェクトをきっかけにして自分の身の回りの観察が，言葉も文化も違う見知らぬ人々の体験と一体となった時に地球全体についての理解が深まるという。

自然文化誌研究会が学芸大野外教育実習施設と共催で行っている「子どものための冒険学校」は，多彩なプログラムを用意しながら，子どもたち自身がその中でやりたいことを見つけるのを待つという方針で行っている。冒険という言葉からサバイバルの様な「すごいこと」だけを想像してしまいがちだが，本会はそれらが各自の興味から始まることを大切にしている。自分の興味や好奇心を満たすために活動ができる場を提供することで，小さな冒険でも各自の冒険がはじまればいいと考えている。

今回の話合いでは，内なる冒険，他人に伝えるための冒険，肉体的，精神的限界をためす冒険等，冒険のとらえ方の違いやそこから発想されるプログラムの多彩さが感じられた。身近な日常の中にも冒険があるという意見もあった。違う発想が集まる面白さが実現できると，冒険学習の可能性が広がるのではないだろうか。

自然文化誌研究会　岩谷美苗

• サテライトシンポジウム・「食と農をめぐる環境教育」

コーディネーター：鈴木善次（大阪教育大学）
パネリスト：森本直樹（八尾市立竹渕小学校）
浅井由利子（大阪府立茨木高等学校）
本野一郎（神戸西農業協同組合）
橋本卓爾（大阪府農業会議）
木俣美樹男（東京学芸大学）

シンポジウム開催の趣旨についてコーディネーターから話題提供がなされた後，各パネリストから食と農に関する考え，体験，教育実践について報告された。以下にその内容をまとめた。

森本さんからは，小学校での活動の様子をＶＴＲをまじえて報告があった。ジャガイモ，赤米，キーウィなど農作物の栽培，収穫，試食などの体験を通して子どもたちに「食と農」の大切さを考えさせることができたという。

浅井さんは，高校の家庭科において「食と農」の学習をエビという食品を題材として生徒に「自分たちのライフスタイルと生産地の環境と関わっていること」を意識づけるため，国際理解教育で行われている「貿易ゲーム」を取り入れた学習を行った。

本野さんは本来の農業には教育力があるはずだが近代農業はその力を失っている。その状況を改善するために，有機農業への取り組みが必要であるという考えを述べられた。

橋本さんは都市農業の現状を話され，都市住民に農業の果たす役割を意識づけるための教育が必要であるとし，大阪でのその取り組みを紹介された。

木俣さんは，日本人は米（作）ばかり食べてきた民族ではなく，40年ほど前までは，ムギ，雑穀などいろいろなものを食べてきた。この日本食の伝統を，再創造すべきであり，そうした観点での環境教育の必要性を述べられた。

以上の発言をうけて，フロアーの人たちもまじえて討論が行われた。そこでは，農業体験や学校給食に地元の野菜を取り入れるなどの地域とのつながりの必要性が話し合われた。参加者は約30名

であった。

（原田智代）

・サテライトシンポジウム・「大学における環境教育の実践と課題」を開催して

大学の環境教育に関するシンポジウムあるいは研究集会は，第２回大会から毎年開催しており，今年で４回目になる。この間，第２，３回大会時の研究集会に参加したメンバーで「大学環境教育研究会」が一昨年に結成され，昨年からは研究会が中心になってシンポジウムを開催している。

今年のテーマは昨年と同様「大学における環境教育の実践と課題」であったが，副題に「環境意識・行動変化を生み出す教育の創造」を掲げた。川又淳司氏（立命館大学）と和田武の二人が司会を務め，安東毅氏（九州大学名誉教授），下羽友衛氏（東京国際大学），井上有一氏（奈良産業大学），広瀬幸雄氏（名古屋大学）の四人のシンポジストより報告を受けた後，フロアーからも含めて討論が行われた。参加者は約５０名であった。（井上氏は大会直前に急遽，第二回ＣＳＤ「国連持続可能な開発委員会」出席が決まったためレポート参加）

安東氏は「一般教育での水をテーマとした環境教育」として九州大学で８年前から行われてきた総合科目「水の科学」の講義内容と講義に対する学生評価の結果に基づいて，生活に密着した水環境に対する科学的認識が学生の環境意識を変化させていることを述べられた。下羽氏は「ゼミ『国際政治学演習』による環境教育」と題して，社会科学系専門ゼミで学生主体のパネルディスカッションや研究発表を毎年大学祭で行い，その成果を出版することなどを通じて多くの学生が意識や行動を変化させ，数名は職業選択にも結び付いたという実践例を報告された。井上氏は「環境教育容量の概念と環境意識の変化」と題して，カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で実践されている「地域カプセル」を想定した状況で持続的に生存する条件を調査し，考えることで，「限界」をもつ環境下での人間のあり方を考える教育について紹介された。広瀬氏は社会心理学の立場から「『地球規模で考える』と『身近なところで行動する』との関連」と題して，資源ゴミリサイクル活動を通じて，個人だけでなく，コミュニティ全体が環境保全的行動をとるように変化するためのさまざまな方法について地域で実験的に検討した結果を報告された。

その後のフロアーからの質問や意見と討論によって，さらに内容豊かなものとなった。環境意識・行動変化を生み出すには，今日の環境危機の本質とその社会的原因についての理性的認識と実践や体験を通しての感性的認識を共に深化させるための有効な方法の研究が一層重要になっていることが示唆され，非常に参考になるものであった。開催前は十分に時間があると考えていたが，論議を打ち切るのが惜しいように感じたシンポであった。

（大学環境教育研究会　愛知大学　和田　武）

・サテライトシンポジウム・「第三世界と環境教育」

94年５月15日，本学会甲南大学大会の２日目に「第三世界と環境教育」というシンポジウムを行いました。概要は実践発表２件，意見交換，講演，アジア環境教育フォーラムの呼びかけでした。

東京都町田市和光小学校の小菅盛平先生は，カリマンタン島で先生自身が撮影したスライドを交えて，授業の様子を発表していただきました。小学校３年生対象の授業だから，発展途上国の問題点から入るよりも，現地の人々の生活に焦点をあてて，授業化したそうです。カリマンタン島には，日本の文化の源流があるということを強調なさっていました。埼玉県立滑川高校の松本浩一先生も，熱帯林の伐採を題材とした授業を発表していただきました。

帝塚山大学国際理解研究所の米田伸次先生の講演は，1974年のユネスコの国際理解教育に関する勧告を改訂するという動きについて，ご講演いただきました。フィリピンでの会議にご出席されたそうで，その時の各国代表の意見の応酬の様子をご紹介いただきました。アジア諸国代表の意見で原案に無かった「環境教育の取り組み」を推進するという内容が加えられることになったそうです。

現在の時点では，1974年の勧告は，歴史的文書として，そのまま文言の改編は行わず，宣言と行動的アクションプランを打ち出すことになりました。今日の国際理解教育－「平和・人権・民主主義，持続可能な開発のための教育」－という名称が用いられるようになる見通しです。

最後に大島順子さんから，アジア環境フォーラム開催準備会議の取り組み状況の紹介と協力要請の呼びかけが行われました。アジア諸国の環境教育実践家を招いて，研究・実践の交流をするという目的で準備を進めているそうです。

（千葉県佐倉市立臼井中学校　善財　利治）

・サテライトシンポジウム・本音で語る「いい夢まちの人づくり」

このシンポジウムは，もともと大阪，兵庫の自治体職員の呼びかけで，今後環境教育をより広く進めていく上で，環境行政と学校の先生や教育委員会，そして一般住民の方々とどのようなつながり，協力関係をつくっていけるのか率直に話し合うことが目的でした。

シンポジウムは前半，「リレーと～く」と称して，大阪府，神戸市，豊中市，吹田市教育委員会，八尾市の５つの自治体から，ここ数年の環境教育への取り組みがそれぞれ15分程度で紹介されました。大阪府からは府内の市町村とのネットワークづくり，神戸市からは庁内で縦割り行政を越えて横の連携をつくっていくこと，豊中市からは学校現場やＰＴＡなど，多方面への呼びかけによって協調関係をつくってきたこと，また吹田市教育委員会からは環境行政と一体となった小学校用の副読本づくりについて報告されました。

午後は八尾市から，市民を動かし協力し合った多彩な活動について話されたのち，会場の方々の意見発表を中心とした「フリーと～く」を約50分行いました。会場には，関西を中心とした自治体職員や小中学校，あるいは大学の教員の方々，また一般市民の方々も多く集まられ，80名近い参加となりました。先生たちからは，子供たちを引きつけるには，まず生き物を対象にした題材が適していることや，副読本などに関しても環境教育を学校に丸投げするのではなく，あとのサポート体制がいることなどが出されました。市民の方からは親として子供を通したＰＴＡ活動の重要性について話されました。

今回，学会という場を十分に活用し，環境行政と学校や一般市民が「環境教育」という新しい課題について本音で語り合い，次への発展を考えていくための第一歩を築けたのではないでしょうか。

（大阪府環境局　奥田　孝史）

・サテライトシンポジウム・幼・小・中・高（学校教育）ネットワーク

過去３回関連集会に引き続いて，今回はサテライト・シンポジウムということで，午前がパネルディスカッション，午後が実践交流会という形で，約40人が参加した。

午前のパネルディスカッションでは，関東，関西それぞれ小・中・高の教員計６人がパネラーとして，各自の環境教育の考え方や幼・小・中・高の関連性のある取り組みなどを発表し，討論のたたき台となる報告をした。

東京都府中市立日新小学校の遠藤正氏は，身近な自然に目を向け，ジャム作り（桑，梅，アンズ）や街路樹のトチの実拾いなどの体験活動をさせ，教師自らも「悩む人」となってさまざまな情報から熟慮の結果行動するという教師としてのライフスタイルを紹介した。

そのほか，奈良環境教育研究会の活動の視点から教師が楽しむことの重要性を報告した奈良県東榛原小学校の本庄眞氏，中学校理科における独自のカリキュラム構成を提唱した大阪府東大阪市立花園中学校の福島古氏，市民参加の環境学習の取り組みを中学校の立場から報告した神奈川県藤沢市立六会中学校の有馬進一氏，野外調査を取り入れた高校での日本史授業について発表した千葉経済大学附属高校の亀井尊氏，ＳＴＳ教育の教材として「水俣病」に取り組んだ大阪府立磯島高校の塩川哲雄氏というように，多彩な実践から学校教育における環境教育の可能性を確かめあった。

午前午後を通じて今回のシンポジウムでは，幼・小・中・高それぞれの分野の教員を巻き込んだ

地域教材の開発から環境教育の体系化を計ることの必要性や，原体験と発達段階の関連，環境教育の出口の問題，自然観察や生物観察だけでは環境教育とは言えないといった論議がなされた。

来年もこのネットワークでシンポジウムを持つことが確認されたが，今年議論された問題からテーマをしぼってネットワークとしての方向性を示すことが必要であろう。

○ミニ・ワークショップ報告

・「環境教育ゲームを作ってみよう」

わたしたちネイチャーセンター研究会では，前回・筑波大会でのネイチャートレールを体験するワークショップに引き続き，今回はゲストにニュージーランドからリンダ・バーンズさんを迎え，環境教育にゲームを活かすことを学ぶワークショップを実施し，32名余りの参加者がありました。

日程説明のあと，最初はバーンズさんからゲーム活動を環境教育に活かすことについて解説がありました。ご自身の経歴と重ねながら，明確な教育目標を設定すれば，ゲームなど様々な活動が有効な手段になりうる，とのわかりやすい説明でした。

次は，ニュージーランドの絶滅危惧種の保護教育のためのプログラムの紹介で，実際にゲームを体験しました。"Sound Off 「鳴いてみましょう」"は目隠しをして，鳴き声をたよりにパートナーを探すゲームで，捕食者と餌の関係を，もう一つの"Habitat「生息地」"は動物の分布を「調査」する活動を通じて生息地の概念を学ぶゲームです。これらは，在来種の減少の原因である「未知の捕食者の導入」と「生息地の破壊」を学ぶため，既存のゲームをアレンジして作ったものです。

続いて３つの班に分かれ，目標（その活動から何を学ぶのか），対象（年齢，人数など）トピック（素材，テーマ）を設定し，ゲームの具体的な内容を検討しました（昼休みを含めて１時間余りと時間は不足）。最後に各班からゲーム案が発表され，皆で討論しました。

アンケートから，環境教育にゲームを活かす今回の狙いは着実に伝わっていることとともに，参加者が主体的に参加できるワークショップが今後も期待されていることがわかりました。将来の大会の実行委員会でもぜひ考慮していただきたいと思います。

より詳しい報告は「ネイチャーセンター研究」誌に掲載予定です。関心のある方は自然教育研究センター・小林（電話0425-28-6595）までご連絡ください。（ネイチャーセンター研究会・今回の担当：川村研治，小林毅，林浩二，平松葉子，古瀬浩史，森美文）

（千葉県立中央博物館　林　浩二）

・環境教育プログラムとしての「スライド・ショー」の可能性

・参加者：約30名

古くて新しい映像メディア「スライド」。“大画面で美しい”“編集が簡単”“じっくり考えさせることが出来る”等々のスライドが本来持っている特性に加えて，ディゾルブ映像装置（画面を重ねる効果）や効果音などの使用によって，今，スライドプログラムは強力な教材になろうとしている。そして，スライド映像の画面は感性を大切にする環境教育プログラムにとっても〝手軽で力強〟いメディアとなった。

・ワークショップ内容

午前中／スライドプログラムの観賞と制作者を囲む批評会（作品上映順）

「お寺の森のいきものたち」約15分

製作：西村仁志（環境共育事務所カラーズ）

「つちのこソイルのぼうけん」約10分

制作：浅野晴良（マザーアースエデュケーション）

「一本の樹」約10分／

製作：藁谷豊（ワークショップ・ミュー）

「街の視点解説」約15分

製作：高田研（豊中市立第８中学校）他

「地球のきもち」約18分

製作：川嶋直（財団法人キーブ協会）

上記スライド・プログラムを観賞しながら，各作品毎に制作者と参加者による，作品作りについ

てのディスカッションを行なった。プログラム作りの技術的なことから，ナレーションの原稿内容まで，様々な話題が討議された。

午後＝「フォトランゲージ」約30分

［進行：河村信治（環境教育トレーナー研究会］

フォトランゲージは，写真を使ったグループ学習体験だ。写真家の河村さんの進行で，写真を使ったコミュニケーション手法の実際について体験した。環境問題への気付きへの導入として優れた手法だと思った。

・感想

「いままでの，スライドは退屈で居眠りしてしまうものというスライドプログラムへの認識を改めた。」「面白そう，自分でも作ってみたい」という感想が聞かれた。既製の教材を買い求めるのではなく，独自の教材作りにドンドン挑戦してもらいたいと願う。

（財団法人キープ協会環境教育事業部　川嶋　直）

・ペープサート『郡川ホタルサミット』（紙人形劇）

実演日時：平成６年５月15日（日）

実演回数：２回（午前11時及び12時30分）

実演場所：甲南大学２号館４階会場Ｋ（242講義室）

実演者：八尾市生活排水アドバイザー及び市職員17名

参加者：70名

・プログラム内容

平成５年度，八尾市より委嘱を受けた生活排水アドバイザーが企画・運営を担当し，郡川流域の自治会と連携して開催した『郡川ホタルサミット』の中で行った生活排水アドバイザー制作のペープサート（紙人形劇）である。

ホタルの夫婦を主人公にして，子供たちにも出来るだけ分かりやすく，楽しみながら，ホタルや川の大切さを理解できるようにと作成したものである。

・所感

環境問題の啓発には，今までの行政主導型から市民参加型への転換が大切である。また，啓発内容についても分かりやすく，興味が持てるような楽しいものが望ましい。

今回，八尾で試みた生活排水アドバイザーが主体となった紙人形劇を紹介させてもらったが，参加していただいた自治体職員等の方々の今後の活動の参考になれば幸いである。

市では，八尾市生活排水アドバイザーを中心として，無理なく継続できる，分かりやすく，楽しい取り組みを通して生活排水問題を提起し，望ましい水環境を目指して活動して行きたいと考えている。

（八尾市環境部環境総務課）

・イヤークリーニングをして耳を澄まそう

音マップという音によるネイチャーゲームの枠をこえて，聞いてきた音を直接図形楽譜に描き，それをグループごとに模造紙にさらに大きな図形楽譜としてまとめます。さらにその楽譜にそって楽器で聞こえていた音を再現して音楽のように奏でることで，参加者に今私たちを取り巻く音の環境を再確認していただくワークショップでした。

さらに「森の中」という曲を全員でアンサンブルして，このワークショップを終えたのです。この曲は，人が森に入っていく足音，森の風の音，遠くで聞こえる鳥の声などに電子音のメロディーを重ねて情景音楽として流し，参加者がその中に鳥，枯葉，木などに音（打楽器など）でなって加わり音楽を完成させるものです。人間以外のものになり，互いに調和して生きていかなければならないことを確認するのです。

はじめは音楽関係者でない参加者に，音をつくるワークショップがどこまで環境教育としての意義を理解していただけるか不安でした。しかし，音マップをつくるだけでは受身な環境の認識で，理想とする環境への創造的な提案が生まれてきません。今流れている音を実際の音に再現していく過程に参加者は無意識に環境を整える行為を学んでいけるからです。

学会後数名の参加者から励ましの手紙を受け取りました。私たちは参加したことを大変有意義だっ

たと考えています。

しかし導入部の説明は音楽を言葉で説明する陳腐でしかないと反省しております。また準備時間（楽器）がかかるので今の会場の現状では無理があること，3時間のなかでは十分伝えられないなどの問題点は今後の課題としたいと思います。

（長谷川　有機子・Studio My Pace（スタジオ　マイ　ペース））

・タイトル：Project Learning Tree（ＰＬＴ）
参加者：16名
場所：甲南大学
進行：木内　功（財団法人・大阪府青少年活動財団）
山本幹彦（財団法人・京都ユース・ホステル協会）
内容：①導入
②ＰＬＴを体験してみる
「じっくり観察してみよう」「生き物どうしのつながり」
③ＰＬＴの説明
「歴史・特徴・基本概念・使われ方」
④ＰＬＴを自分たちでやってみる
⑤まとめ
所感：　体験を通して環境を学ぶ方法の必要性については理解されていると思うが，具体的な方法を模索しているのが現状ではないでしょうか。「使えそうに思う」「使ってみたい」という感想にもあったように，ＰＬＴの事例集に紹介されている活動を体験し，さらに実際に使ってみることで，ＰＬＴという完成された活動から，体験学習の方法（組み立て方）や効果が実感してもらえたのではないでしょうか。

学会という場で，実際の活動をワークショップという形式で実施できたことは，多くのリアクションとネットワークを得ることができた貴重な機会となった。

○展示　14日（土）・15日（日）
「一泊二日でもこれだけできる！」柴田敏隆（三浦半島自然保護の会）
「甲子園浜を守る－イソガニはたたかった－」平野勉（甲子園浜の埋立てを考える会）
「神戸エコアップ研究会の活動」秦誠（神戸エコアップ研究会）
「子どもが育つ地域社会づくり『子ども楽園村』を活用することで」神山裕子
「森林・林業に関する体験と意識について」遠藤良太（千葉県林業試験場）
「炭焼き集団『南河内・水と緑の会』ってどんな会？」笠原英俊（南河内・水と緑の会）
「生活環境学習のための環境情報データーベース」新井正一（目白学園女子短大）
「地域住民の目から見た『士幌高原道』」北海道大学自然保護研究会
「ネイチャーセンターへようこそ」小林毅（ネイチャーセンター研究会）
「ボランティア・ワークショップでの環境教育」赤松良彦（BLUE NETWORK）
「めざせインタープリターへの道」箱田敦只（日本野鳥の会）
「大学における環境教育の実践」寺杣智志，城山善博（甲南大学有機農業研究会）